新発見の京都大学蔵『北京内城図』を含む清代八旗方位図群の総合的研究

代表研究者　杉浦和子
京都大学大学院文学研究科　教授

緒　言

清代に作成された数多くの北京図のなかに、満州・蒙古・漢軍の八旗（清の支配階層を構成する軍事的・社会的組織）の分布を示すものがある。こうした北京図で、現在までに所在が確認されているものは5点しかない。これらは、満・蒙・漢軍を示す○と□と△の記号を八旗（正黄、正白、正紅、正藍、鑲黄、鑲白、鑲紅、鑲藍）に対応する配色で区別し、北京内城における三軍八旗の空間的分布を詳細に示す点で、清代の八旗制度ならびに北京の都市空間構造の研究にとって、極めて貴重かつ稀有な資料である。しかしながら、これらの北京図の持つ情報の意味が十分認識されていないこともあり、李孝聡（1994）[1]や孫果清（2005）[2]、田中・木津（2015）[3]を除き、既往の研究は多くない。

本研究では、これら5点の北京図のうち、2015年末までに高画質のデジタル・データを入手できた3点、すなわち、大英図書館所蔵『精絵北京旧地図』、王立地理学協会（ロンドン）所蔵“*Map of the Inner City of Pekin*”および京都大学所蔵『北京内城図』を分析する。3点の北京図に示される八旗分布の空間的・数量的な特徴は何か、どのようなルールで八旗記号が地図上にプロットされているか、3北京図の間の類似点と相違点は何かといった諸問題に加え、地図に描かれた八旗分布が、清代の文献に記載された八旗配置と一致するか否かを検討する。こうした分析を通じて、これらの北京図における三軍八旗分布の意味を明らかにすることが、本研究の目的である。

用いた文献と分析方法

上述の3点の北京図のほか、地名や施設名を特定するため、『乾隆京城全図』（1750）を参照した。清代における八旗に関する代表的な文献として、『八旗通志初集』（1739）、『欽定八旗通志』（1796）、『（嘉慶）欽定大清会典事例』（1818）、『（光緒）欽定大清会典事例』（1899）、『（光緒）順天府志』（1884）、『宸垣識畧』（1788）の記載を参照した。

まず、『精絵北京旧地図』、“*Map of the Inner City of Pekin*”および『北京内城図』の基本的な特徴を比較し

表1　3点の北京図の基本的特徴

地図の名称	精絵北京旧地図	*Map of the Inner City of Peking*	北京内城図
所蔵機関（都市）	大英図書館（ロンドン）	王立地理学協会（ロンドン）	京都大学（京都）
作成時期	嘉慶年間初期（1797–1815）	1865（?）	19世紀後半
サイズ：縦×横	184×221 cm	155×141.5 cm（図幅本体） （174×150.5 cm）	151×135 cm
素材	紙	絹布	紙
描写	手描き、彩色	手描き、彩色	手描き、彩色
地図に記載された言語	中国語	中国語、英語	中国語
地図の描く範囲	北京内城	北京内城	北京内城
三軍を示す記号	○　満州 □　蒙古 △　漢軍	○　満州 □　蒙古 △　漢軍	○　満州 □　蒙古 △　漢軍
縮尺	記載なし	1 : 4000	記載なし

表2 『精絵北京旧地図』に描かれた三軍八旗の記号の数と『(光緒) 欽定大清会典事例』(1156巻, 1899) に記載された汎と柵欄の数の比較

	皇城を除く内城												皇城		
	満州			蒙古			漢軍			合計			満州		
	汎[1]	柵欄[2]	他[3]	汎[1]	柵欄[2]	他[3]	汎[1]	柵欄[2]	他[3]	汎[1]	柵欄[2]	他[3]	汎[1]	柵欄[2]	他[3]
正黄旗	54	91	1	18	28	1	16	40	0	88	159	2	11	11	2
	55	91	—	18	30	—	18	41	—	91	162	—	12	16	—
正白旗	45	88	3	19	30	0	16	29	0	80	147	3	13	7	2
	51	90	—	20	35	—	14	31	—	85	156	—	11	10	—
正紅旗	35	72	2	13	36	0	9	9	0	57	117	2	10	13	0
	38	79	—	14	36	—	10	14	—	62	129	—	12	17	—
正藍旗	44	81	1	21	43	0	15	12	1	80	136	2	16	8	1
	45	87	—	19	45	—	15	15	—	79	147	—	11	9	—
鑲黄旗	51	94	0	21	29	0	18	27	0	90	150	0	12	12	5
	53	94	—	22	29	—	17	27	—	92	150	—	10	18	—
鑲白旗	41	73	0	14	32	1	12	16	0	67	121	1	10	12	1
	46	80	—	13	35	—	12	18	—	71	133	—	10	13	—
鑲紅旗	43	92	4	13	23	0	11	35	0	67	150	4	12	26	0
	48	96	—	13	23	—	10	39	—	71	158	—	12	24	—
鑲藍旗	51	90	1	15	27	2	11	31	0	77	148	3	12	5	0
	50	97	—	15	24	—	10	34	—	75	155	—	12	9	—
合計	364	681	12	134	248	4	108	199	1	606	1128	17	96	94	11
	386	714	—	134	257	—	106	219	—	626	1190	—	90	116	—
	1057			386			308			1751			201		
	1100			391			325			1816			206		

注1. 点線より上の数値は、『精絵北京旧地図』から得たもの。点線より下の数値は、『(光緒) 欽定大清会典事例』から得たもの。
注2. 原図に破損部分があるため、八旗記号の中には、確認できなかったものがある。
1 汎：点線より上の行の数値は、汎の基地を表す絵（小さな家）の近くに描かれた八旗記号の数。点線より下の行の数値は、文献に記載された汎の数。
2 柵欄：点線より上の行の数値は、柵欄を表す絵（柵）の近くに描かれた八旗記号の数。点線より下の行の数値は、文献に記載された柵欄の数。
3 他：点線より上の行の数値は、特定の施設の近くに描かれていない記号の数。

た。各北京図を詳細に観察し、三軍八旗を示す記号の数量を確認したうえで、『精絵北京旧地図』に示される八旗記号の数量を、『(光緒) 欽定大清会典事例』(1156巻、1899) に記載された汎 (守備管轄領域の単位) と柵欄 (通りの入口に設けられた柵) の数量と比較した。八旗の空間的配置に関しては、3北京図各々について三軍の記号の分布を抽出し、八旗領域を区画した。さらに、上記の清代の文献の記載をもとに、北京内部の八旗配置パターンを整理し、3点の北京図の配置パターンと比較した。

分析結果と考察

1. 清代の北京は、内城および外城から構成され、内城の中に皇城が、皇城の中に紫禁城があった。3点の北京図は、内城部分のみを手描きし、彩色している (表1)。3点の中で、『精絵北京旧地図』の図幅が最も大きく、作成年代が古い。これに対し、“*Map of the Inner City of Pekin*” と『北京内城図』の作成年代は、19世紀半ばから後半と推定されている。3図に見られる街区の分割状況や王府・公府の名称の異同に関する検討も、こうした年代推定を裏付ける。“*Map of the Inner City of Pekin*” は、絹布に精緻に描かれ、地名や施設名が中国

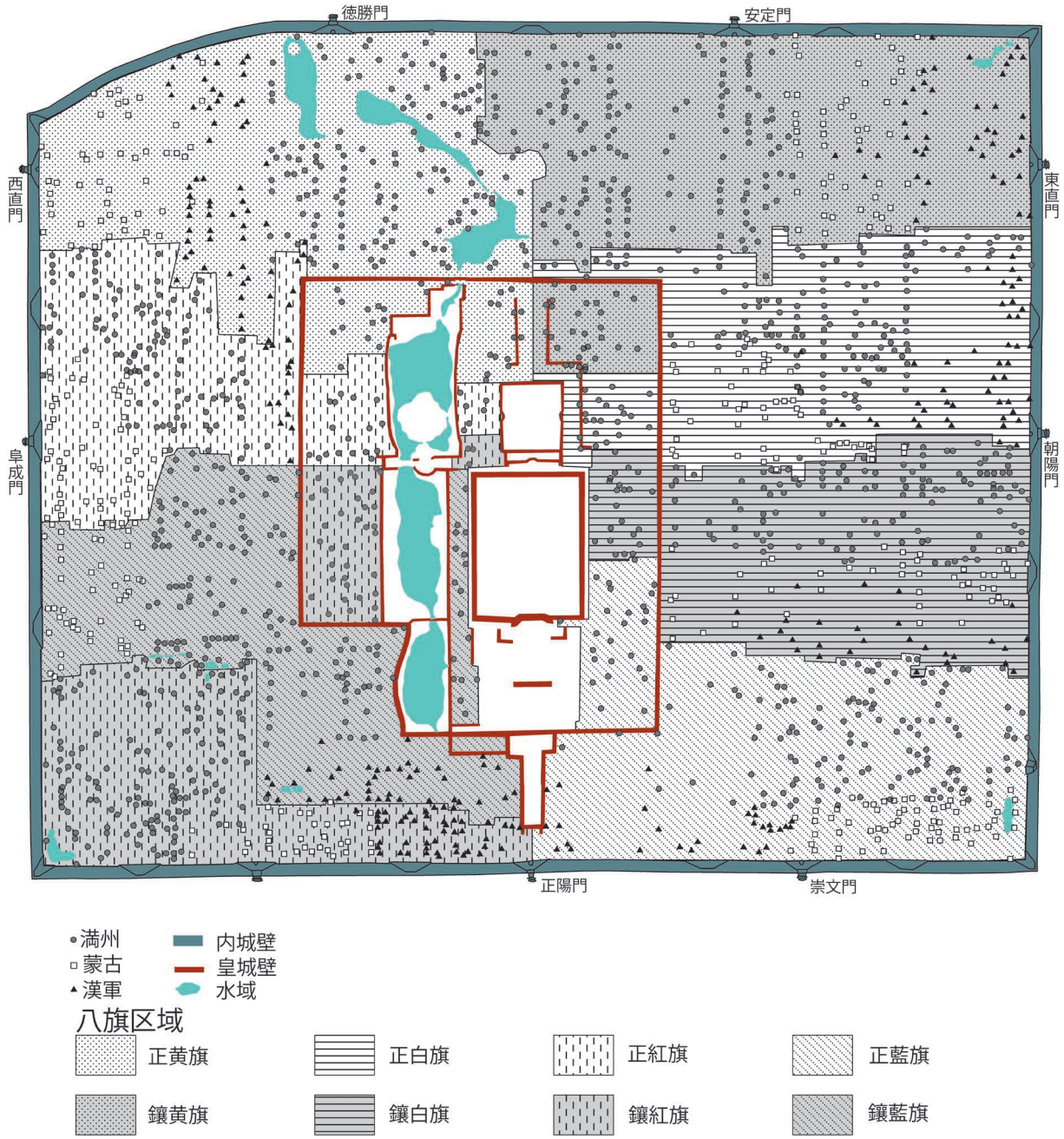


図1　『精絵北京旧地図』に示される満州・蒙古・漢軍の八旗記号の分布

語と英語で書かれている。『精絵北京旧地図』と『北京内城図』は、紙に描かれている。

2.　三軍八旗の記号の総数は、『精絵北京旧地図』では1952（うち、201が皇城内に分布）、“*Map of the Inner City of Pekin*”では664（うち、84が皇城内に分布）、『北京内城図』では550（うち、68が皇城内に分布）である。ただし、『精絵北京旧地図』と『北京内城図』には破損・欠損部があるため、実際に描かれた記号の数は若干、多かった可能性がある。いずれの北京図でも、皇城内部に分布する八旗は、満州のみである。三軍八旗、合計24のカテゴリー各々の記号数の比率は、各々の北京図においても、3点の北京図間においても、均等ではない。

『精絵北京旧地図』に描かれた八旗記号は、他の北京図のそれの3倍近くに達する。この理由を探るため、同図に描かれた記号の数量と、『（光緒）欽定大清会典事例』（1156巻、1899）に記載された、八旗による防守体制にかかわる汛と柵欄の数量とを比較したところ、両者は非

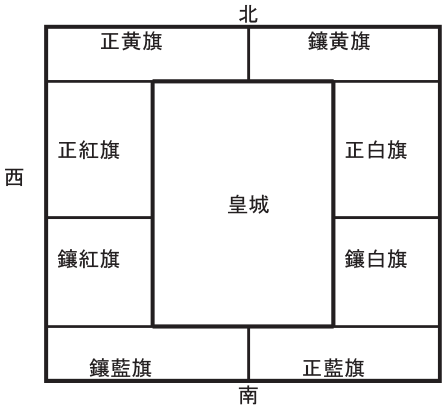
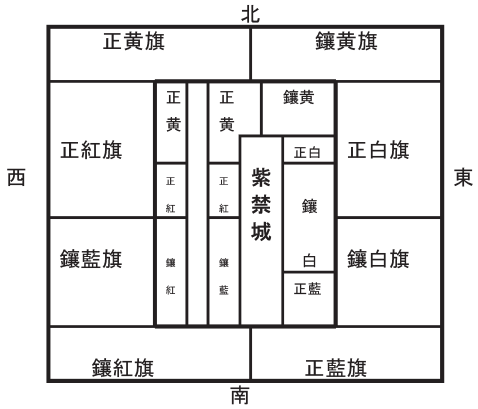
参領（編成軍の長）と佐領（最小編成軍の長）ごとに割り当てられた八旗の居住区域の配置	汎（守備管轄の単位地区）と柵欄（通りの入り口に設けられた柵）ごとに割り当てられた八旗の防守区域の配置
	
『八旗通志初集』（1739），第 2 巻，「八旗居址」	—
『欽定八旗通志』（1796），第 30 巻，「八旗地界圖」	『欽定八旗通志』（1796），第 34 巻，「歩軍營汎守之制 」
『（嘉慶）欽定大清會典事例』（1818），第 838 巻，「八旗界址」	『（嘉慶）欽定大清會典事例』（1818），第 875 巻，「守衛」
『（光緒）欽定欽定大清會典事例』（1904），第 1112 巻，「八旗界址」	『（光緒）欽定大清會典事例』（1904），第 1156 巻，「守衛」
『宸垣識畧』（1788），第 5-8 巻，「内城」	—
—	『（光緒）順天府志』（1884），第 8 巻，「汎守分旗畫界」

図2　清代の文献に記載された2種類の八旗配置パターン

常によく一致していた（表2）。『精絵北京旧地図』では、個々の記号（○、□、△）の大部分が特定の汎や柵欄の近くに描かれ、関連づけられている。“*Map of the Inner City of Pekin*”と『北京内城図』では、特定の施設の近くに描かれた記号はない。こうした検討を踏まえると、『精絵北京旧地図』が、3点の北京図の中では、三軍八旗の配置に関して、最も詳細な情報を示している。また、同図における記号のプロット方法は、他の2点の北京図における方法とは異なる。

3.　3点の北京図のうち、八旗記号が最も稠密に分布するのは、『精絵北京旧地図』である（図1）。八旗それぞれの分布域が、明瞭に分かれているため、識別を容易にするため、分布域の間に境界線を描いた。内城内部の八旗分布域の配置は、北東隅から時計回りに、鑲黄旗、正白旗、鑲白旗、正藍旗、鑲紅旗、鑲藍旗、正紅旗、正黄旗である。これは、3点の北京図に共通する。皇城内の八旗分布域は、基本的には、内城内のそれに対応するが、3北京図間でやや相違する。最も大きな違いは、『北京内城図』の皇城内には、鑲藍旗の分布が見られないことである。

各旗の分布域内部において、満州、蒙古、漢軍の分布は、相互に明確に分離している。これも、3点の北京図に共通する特徴である。

4.　八旗に関する清代の文献には、2つのタイプの八旗区域の配置が記載されている。図2にそれらを図式化したものを示す。1つは、三軍八旗に所属する参領および佐領への内城内における居住地区の割り当てであり、他の1つは、三軍八旗の各々が警護する汎と柵欄の割り当てであり、その範囲は内城と皇城に及ぶ。前者の居住区域の配置は、内城の北東隅から時計回りに、鑲黄旗、正白旗、鑲白旗、正藍旗、鑲藍旗、鑲紅旗、正紅旗、正黄旗である。この配置は、『欽定八旗通志』（1796）などの文献にも簡略な図として掲載されており、五行で唱えられる理想的な配置に従うことが知られている。

これに対し、防守地区の配置では、内城南西部の鑲藍旗と鑲紅旗の防守地区の位置が、居住地区のそれとは逆転している。文献の記載に基づいて図式化した内城と皇城を含む防守地区の配置パターンは、本研究で分析した3点の北京図の八旗の空間的配置に一致する。なお、この防守地区の配置図は、文献には掲げられていないことを指摘しておく。

5.　文献に記載された八旗の防守地区の配置をより詳細に検討するため、『（光緒）欽定大清会典事例』（1156巻、1899）を用いて、八旗領域の境界線を描き、3点の北京図と比較した。これらのうち、最もよく似ているのは、『精絵北京旧地図』である（図1）。『精絵北京旧地図』、“*Map of the Inner City of Pekin*”および『北京内城図』は、清代北京における三軍八旗の防守体制の空間

的配置を示す地図である。

要　約

本研究では、『精絵北京旧地図』、“*Map of the Inner City of Pekin*”と『北京内城図』、ならびに関連する清代の八旗に関する文献史料を用いて、北京内城における満州・蒙古・漢軍の八旗の空間的配置を検討した。その結果、これらの北京図は、内城および皇城内に所在する汎と柵欄への警護任務の割り当てに基づいた、八旗の防守体制の空間的配置を示すものであることが明らかになった。この配置パターンは、八旗居住域の空間的配置パターンとは、範囲（皇城を含むか否か）や八旗の配列、区域境界の形状において異なる。

謝　辞

本研究を遂行するにあたり、研究助成を賜りました公益財団法人三島海雲記念財団ならびに関係者の皆様に深く感謝申し上げます。共同研究者である盧雪燕先生（台湾国立故宮博物院図書文献処典蔵科・科長）、谷井陽子先生（天理大学文学部・教授）ならびに木津祐子先生（京都大学大学院文学研究科・教授）には、多くの有益なご教示をいただきました。厚く御礼申し上げます。

文　献

1) 李孝聡：国学研究（北京大学中国伝統文化研究中心），Vol. 2, pp. 449–481, 1994.
2) 孫果清：中国古代地図集―城市地図（鄭錫煌編），pp. 241–244, 西安地図出版社，2005.
3) 田中和子・木津祐子：京都大学文学部研究紀要，**54**, 1–28, 2015.